

海の鹿道を復活しよう！

1．海を渡る鹿

馬毛島は、種子島の対岸にある小島である。馬毛島と大隈半島は、大隅海峡を隔てておよそ 30 キロの距離にある。この小島に馬毛鹿（日本鹿の亜種）が住む。

昭和 55 年ごろ、鹿児島市在住の堀 輝雄 氏に次の話を聞いた。

「秋は佐多岬から馬毛島へ、春は馬毛島から佐多岬、内之浦海岸に渡り、夏場は北の大隅半島で生活し、秋は南の馬毛島に帰るということです。種子島では、馬毛島にて何物かに追われた鹿が能野海岸や浜津脇海岸に漂着するとのこと。馬毛島の鹿は西之表市の推定によりますと、現在、200 ないし 300 頭程度が生息しているとのこと」

古老の話によると、秋の彼岸のころ、岬の突端では、一頭の牡鹿が見張りに立って日和見をし、穏やかな日時を定めると、一群は列をなして肅々と海に入り、南に向けて泳いで行くという。見守っていると、時折、スッと海中に消えてしまうのだそうで、フカに襲われたのだろうとのことであった。今も、佐多岬辺りでの夜釣りでは沖の岩場に船で瀬渡ししてもらったとき、波が荒いとサメが出ることもあり、撃ち殺してみると、胃袋から鹿の足がでてくることがあるそうだ。大いに興味をそそられた筆者は、調査に乗り出した。

2．馬毛島と馬毛鹿

西之表市百年史には「奈良朝時代に鹿皮百張を年貢として納めた。馬毛鹿は種子島家の年貢として島の経済を支えて来た」とあり、文献には、最盛期には 1 万頭を数えたという。また、大正 11 年、調査した北海道大学の八田三郎博士は次のように書き残している。

「かかる野生の鹿群を一望の下に収める鹿苑が世界のどこにあるか、嶽の越より約一千町歩の大鹿苑を手にとるごとく眺められ、何物の遮るものなきその特別の地形と、他に比較なき千年余歴史を有する鹿苑とは蓋し天下一品で、日本中は勿論、世界中にもない。云々」

ちなみに、フリー百科事典『ウィキペディア』によると、馬毛島（まげしま）は、大隈諸島の島の一つで、鹿児島県西之表市に属する。面積 8.4 平方キロで、ピーク時の 1959 年には 113 世帯 528 人が住んでいたが、河川が無く農業に適さない土地である事に加え、害虫や鹿の農作物被害が増加、生活が困窮し、徐々に島民が減少していった。ニホンジカの一亜種であるマゲシカが棲息する。

簡単に土地利用の面からの歴史を概観すると、ほとんど利用らしい利用がなかったが、1871 年、政府は馬毛島を賃下げし、短角牛の飼育が始まる。1880 年、政府の緬羊飼育牧場となる。...1924 年、緬羊 595 頭となる。1946 年農地解放に伴い、全島は全くの無人化した。その後、1951 年、食料増産のため、復員者、海外引揚者と種子島の農家の次男、三男と共

に、移住開始。農業開拓団 39 戸。甘藷を基幹作物に、陸稲と豚であった。1952 年 15 戸移住 99 世帯 382 人をピークにやがて無人島となる。(07 年 15 名の住民登録あり)

まむしが出るなど劣悪な環境であったことが記されている。

「昭和 26 年開拓団が入植してから馬毛の主人公である鹿は、害獣として密殺や捕獲されて絶滅の一途をたどっています」とあり、鹿が格好の食糧となった。

3 . 九州本島 旧薩摩藩の鹿

400 年以前ごろの鹿児島県における鹿の様子も圧巻で、鹿屋市の資料によれば、

「島津義弘公は大隅地方の百引と牛根、桜島、黒髪の三箇所を狩り場と定めた。島津家では治において乱を忘れずとして、武備の訓練に閑狩りを行った。...中略...義弘公は部下の猛将勇卒を率いて雨をついて百引の広野の大閑狩りを行った。

多くの士卒によって狩り出され逃げ道を失い惑う無数の鹿は、競い立つ勇士の矢にばたばたと倒された。この時、狂奔する鹿の中でひときわ目立つ大きな鹿が木原引兵衛の雁俣の矢に倒された。それが四人持ちの大鹿で矢は表から裏まで突き通っていた。義弘公はこれを見て賛辞をかけ褒美を与えたという。わずか 1 日で 366 頭の鹿を射止めた」とある。

鹿は無尽蔵にいると考えられていたのだろう。「平時に乱を忘れず」との名目で、道楽まがいの狩りが度々行われていたのだ。安土時代、つい四百年前のことである。

4 . なぜ海を渡るのか？ 私の仮説 -

地球最後の氷期には、海水面は今より 140 ㍎ほど低く、種子島、馬毛島も大隈半島も地続きであった。今の秋田県に似た落葉樹中心の植生で、鹿の食物である草も、現在の亜熱帯地域ほど豊かではなかったと想像される。

それでも夏場には北の大隅地方も豊かな草地となり、それを求めて北に足を伸ばし、冬場は南に草を求めてたゆたうように移動していたのではないだろうか。

次ぎに、大正の近代まで、夥しい鹿が小さな島に生息していた事実は、オオカミその他の天敵がいなかったことを示唆しており、したがって飽和状態となって生き延びるべく草を求めて陸地を移動していたのではないだろうか。

なぜいないかという、氷期における始良火山の大爆発(ほぼ 2 万 2 千年前) 鬼界カルデラの爆発(6,300 年前) でオオカミも絶滅したとは考えられないだろうか。

1 万数千年前、氷期が去り、やがて縄文の春が日本列島にもやってくる。地球は温暖化に向い、海水面も上昇する。次第に半島と島に別れて大隅海峡が生まれ、氷期のゼロ㍎地帯が深さ 140 ㍎の海底となり、地続きであった鹿の道も今はその深さに没している。

しかしながら、鹿の DNA に記憶された南北移動の習性は容易に消えず、浅瀬から徐々に徐々に深い海となってからも、泳いで渡る習性は失われなかった...

平成 19 年 5 月、福岡市動物園の指導員に聞いてみた。

「ああ、その話ならば聞いたことがありますよ。何時ですかって？ いや最近ですよ。平成になってからと思いますよ。新聞でみたということです。そう、どの新聞だったかなあ」

そうして、イノシシが海を渡る話ならばここにも記事がありますよ、とって佐賀県の離島に最近イノシシが繁殖して困っている記事を戴いた。

4. 提案

今や伝説と化した海の鹿道。それとも生き証人がいないだけで、今も細々と渡り続けているのだろうか。おそらくは現在ほどの鹿の頭数であれば、過飽和状態ではなく、海を渡る必要もないのではないだろうか。

鹿よ 鹿 波はきらめく 月の夜の 遠い祖先の 道な忘れそ

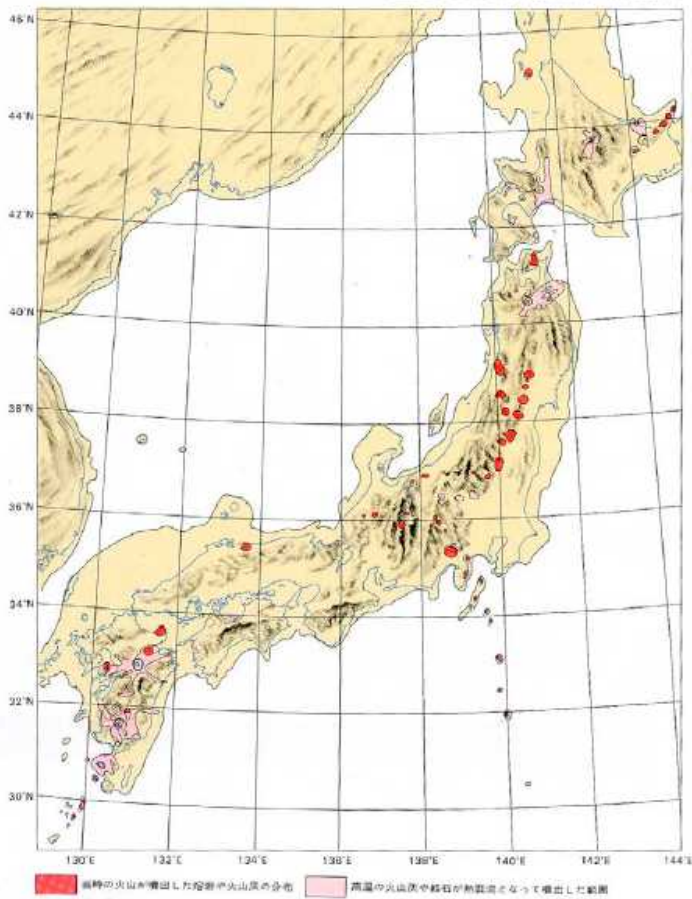
1. 馬毛島を緑化する。すなわち、現在は、マムシが住む、荒れた痩せ地である。また頭数も少ない。八田教授の見た鹿苑の壮観さはそんなものではなかったであろう。特に綿羊を飼えば草地は根こそぎやられる。まず客土して肥沃な土地として緑化し、頭数を増やす。
2. 嶽の越と呼ばれる見晴台からの眺めの復元
3. 鹿が実際に海を渡る訓練を始める。舟で見守りながら海を泳がせ、ゆくゆくは、距離を伸ばし、ついには馬毛島と大隈半島を往来するようにする。
4. この伝説に係る物語を公募したり、また、復活の過程をすべて公開し、それ自体を観光資源とする。

提案の概要

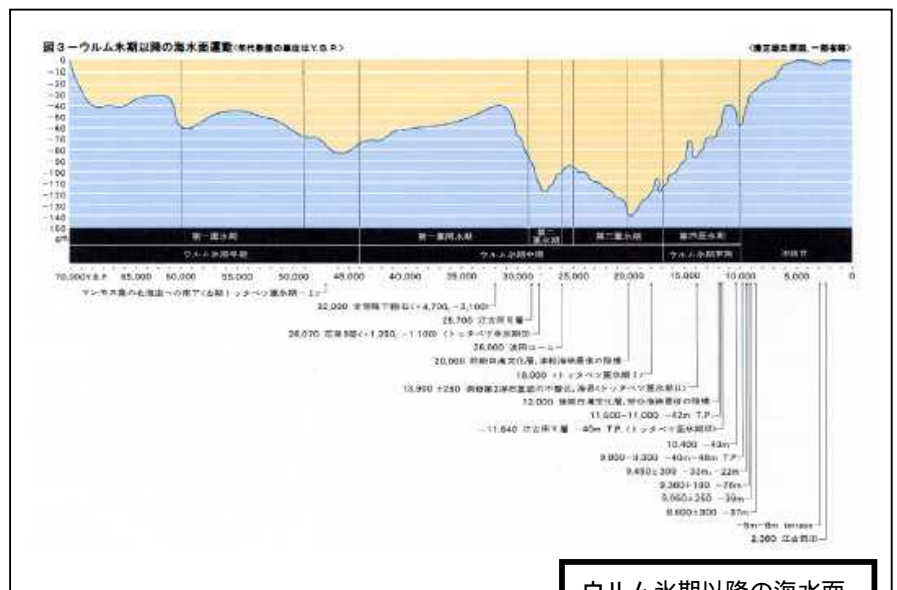
「海の鹿道を復活しよう！」構想は、馬毛島と大隈半島の間を泳いで渡る鹿の伝説によるもので、激減した馬毛島の鹿を増殖させる。嶽の越の見晴台を整備して眺望をよくする。渡海の訓練をして、ゆくゆくは馬毛島と大隈半島のあいだを渡るようにする。復元への過程を観光プロジェクトとするというもの。

図1・C—第四紀・洪積世後期の古地理(15万年まえから1万年まえまで)

溝口謙三等(曾である日本列島のおいたち) 古地理学雑誌より

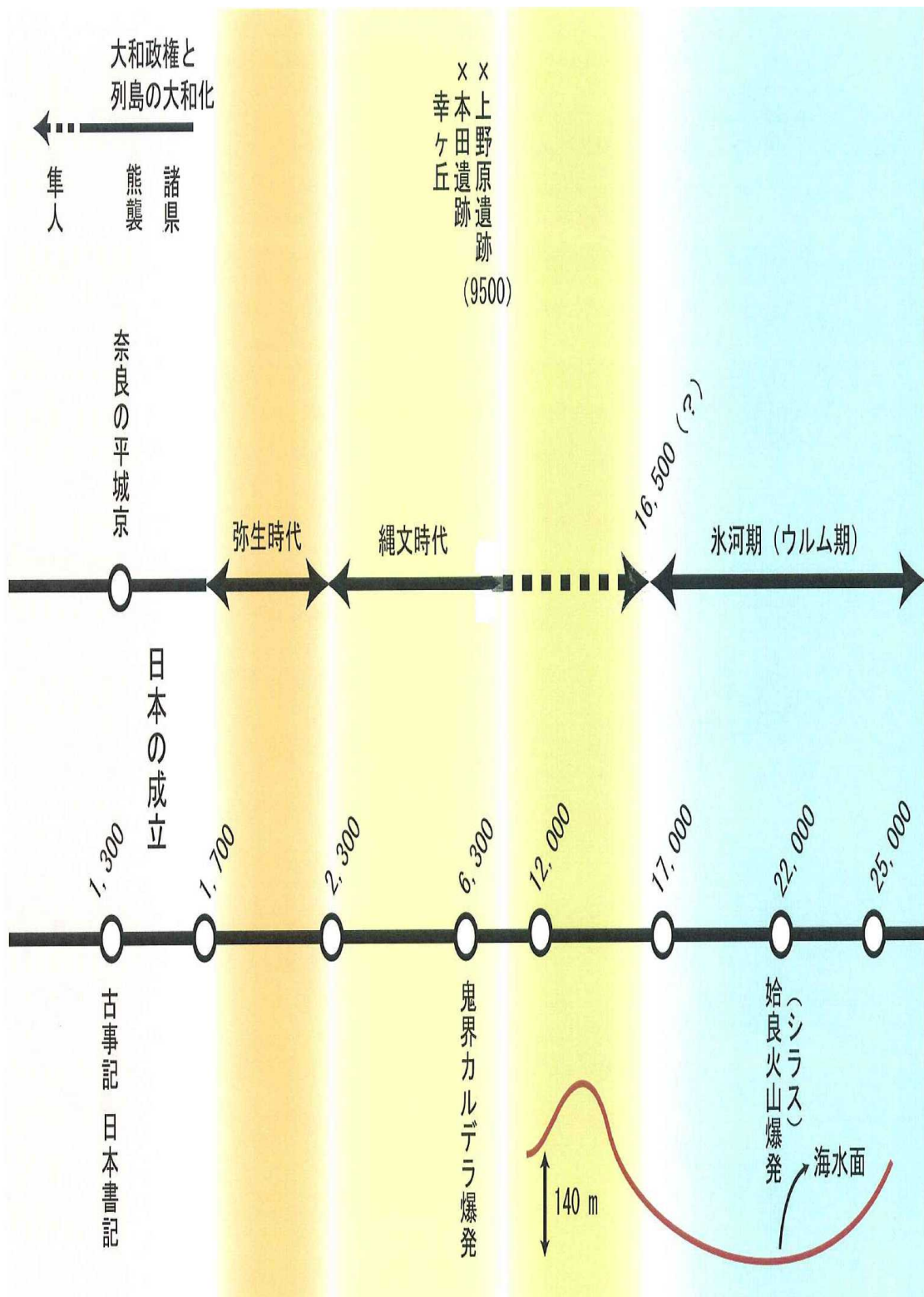


日本列島の変遷



ウルム氷期以降の海水面

参考資料 氷河時代の日本列島 (信州大学理学部教授 郷原保真)



日本列島の変遷